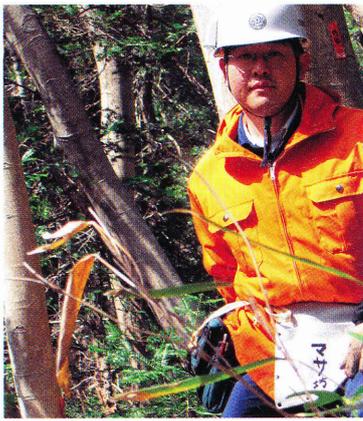


森林官の一日

茨城森林管理署 高部森林事務所 森林官 須崎 智 応

近年、持続可能な森林管理の必要性が求められています。持続可能な森林管理を行っていく上で留意すべき点は、現在のニーズを損なうことなく将来のニーズを満たす事です。この様な困難を伴う考え方のもとに森林管理を実行していく上で、「この山の100年後はどうするのか?」を常に自問自答しながら、施業方法を選択するようにしています。

森林は永年性植物である林木、それに付随する林床植生によって構成されており、特に林齢が経過した林分において誤った判断をした場合、その時間的経過を取り戻すことが困難になるからです。こういった事は天然林においては当然ですが、生産性を追求する人工林においても、その扱いには慎重を期すべきと思われる。



アオダモ展示林内で



両側からアオダモやコナラなどが造林地にせり出してきた (写真-1)

ます。

そういった中で、私は持続可能な森林管理のための取組みとして、天然林資源によらない多様な樹種を、人工林、もしくは天然更新施業によって提供する技術が必要であると考えています。

その一つとして現在、マルバアオダモ展示林の隣接造林地(写真-1)にて、34万本/haの稚幼樹が発生(写真-2)していますが、この造林地を活用し、マルバアオダモの造林試験を試みていますので、その一



冬芽

端を紹介します。

アオダモと聞くと「ああ、バツの木か」と思われるはず。そのアオダモ、実のところその殆どを天然林資材に頼っているのが現状です。

しかし、その主要な産地である北海道においては資源量が減少し、その更新技術確立のための模索が続けられています。

この造林地におけるアオダモ稚幼樹は偶然がいくつも重なって生じたものですが、偶然はなぜ起こったのか?このことを探求することにより、道が見えない更新技術を見えるものにして行く必要性を感じると同時に、この柵ボタを利用しアオダモを育ててみよう、と考えました。

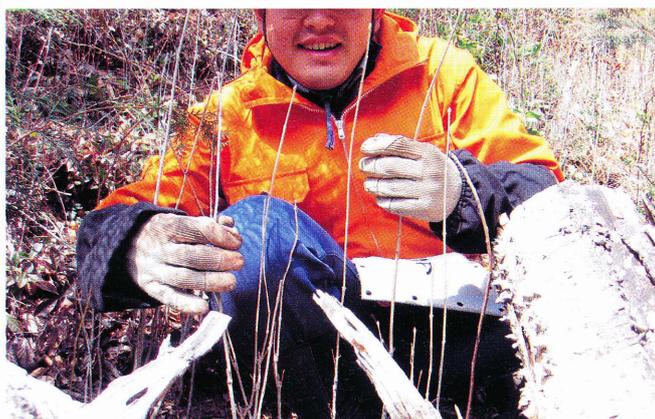
この造林地は、ご覧の通り両側を保護樹帯に囲まれ、ヒノキの成長は十二分に期待できるとはいえません。沢沿いの部分は下刈を実施してヒノ

キを育て、保護樹帯に近い区域は稚幼樹の発生状況を見ながら下刈の区域から除外し、アオダモを育てる区域としました。

ここで、下刈を実施しヒノキを育てる区域、アオダモを育てる区域、また林縁の区域などで植生調査や更新調査を実施し、継続したデータを取得するための取組みを行っています。

山は大きな生き物であると思います。あまりにも山は大きすぎて、私たちはその事を忘れがちですが、山に本当に必要なことは現地にあったきめ細やかな対応だと考えます。

やがて100年後、その土地にあった、緑豊かな森林となっている事を願って止みません。



この実生、子供と同じくらい可愛い!! (写真-2)